

虹の松原にはセミがない？

夏に、虹の松原ではセミが鳴いています。しかし松原の中央部では、鳴き声があまり聞かれません。これはどうしてだろうと、まずセミの抜け殻を集めてみました。セミの抜け殻があるということは、そこでセミが育ったことを意味します。

虹の松原の2ヶ所と浜崎の諏訪神社境内で調べた結果が右図です。

虹の松原の中で育っているセミはハルゼミとニイニゼミだけでした。

セミに関する研究によると、セミには好きな木があるらしく、マツが好きな木はハルゼミとニイニゼミの2種類だけです。ハルゼミは春に鳴くセミですから、夏には小さな声で鳴くニイニゼミしかいないので、そのために松原は静かで、セミがないという話になったのでしょうか。

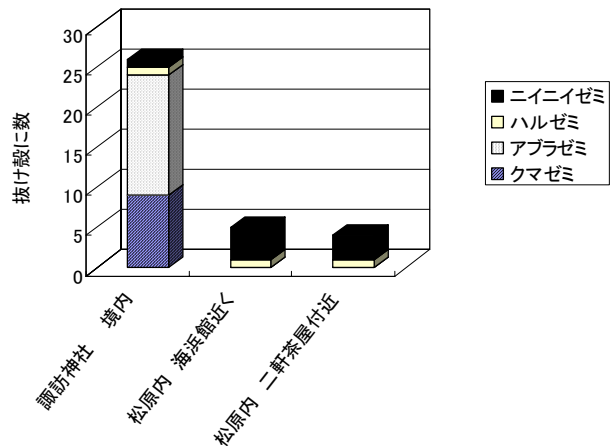
ちなみに、セミの好きな木は次の通りです。

- ミンミンゼミ（サクラ、モミ）、
- ハルゼミ（マツ、ヒマラヤスギ）、
- ツクツクボウシ（アカメガシワ、モミ）、
- アブラゼミ（サクラ、ケヤキ、モミ）、
- クマゼミ（ケヤキ、サクラ、センダン、ホルトノキ）
- ニイニゼミ（サクラ、ケヤキ、エノキ、マツ、モミ）、

最近では、他の種類のセミの鳴き声も聞かれますが、松原の外から飛んできたものや松原の中にマツ以外の木が見られるようになったことに関係ありそうです。

セミには人間の声は聞こえない

セミは大きな声でなく、きつと耳が聞こえないと思って、大砲で大きな音を出したそうです。それでも鳴きやまなかったそうです。調べてみると、セミには仲間のセミの鳴き声しか聞こえないそうです。



虹の松原にはヘビがいない？

虹の松原を散策している時、ヘビと遭遇することはほとんどありません。しかし民家の近くでまれに見かけることがあります。右の写真はその証拠で、アオダイショウです。シマヘビもいます。



昔、松葉かきをしている頃は、落ち葉がなく砂地でした。このような所では、ねずみなどの小動物の餌となるものも少なく、結局はヘビの餌となるものもいなかったでしょう。

虹の松原で数少ないヘビを見かけるということは、それだけ虹の松原に足繁く通っているからでしょう。

ところで、ヘビがいないという不思議には謂われがあります。それは「はまさき諏訪神社」に言い伝えられている話です。昔百済の王子と諏訪姫がかわいがっていた鷹がマムシに襲われて死んでしまいます。諏訪姫は悲しみのあまりなくなってしまうのですが、諏訪姫の願いにより、松原には蛇はいなくなったといわれています。また お諏訪様の「砂」はまむし除けとして農家に珍重されています

槍掛けの松

風によって物理的に枝が折れたり傾いたりする他に、風上側では強い風のために蒸発散作用によって低温となり成長が遅くなったり、場合には乾燥して枯死します。その結果風上側では枝や葉がなく、風下側に伸びていきます。この結果、偏った形の樹（偏形樹）が形成されます。海岸で見られるこのような松は磯馴松（ソナレマツ）と呼ばれています。

長い年月の間には台風や大雪などで幹が傾いたり、倒れたりして変形していったのでしょう。虹の松原では風が強いので、まっすぐ幹や枝が伸びているのは珍しかったのでしょう。

現在、虹の松原では細くてまっすぐな松がたくさん見られます。これは松が密集しているために、風の影響が少ないためと思われます。

槍掛け松は清亮寺（東京都）、勝沼宿本陣（山梨県）にもあります。

にらみのマツ、クロマツばかり

クロマツは海岸のやせた砂地で育ち潮風に強いクロマツが多く植林されたので、クロマツが多いのは当然です。

一部にアカマツが見られますが、苗木の中にアカマツが混じっていたと思われま

す。「にらみのマツ」の解釈には二つあるようです。

(1) 虹の松原は鏡山から見ると、じゅうたんのように見えて、特に高い木は目立ちません。また海岸から見ると、海の方がもっとも低く、陸側に向かって次第に高くなっています。すなわち風の抵抗が最も少ない形になっています。

一本だけが飛び出ると、強風、飛砂、飛塩の影響を受けて、その部分の成長が止まってしまい、結局は他の木と同じ高さになります。また風が強いほど、最前線は低く陸の方向の傾斜は緩やかになります。にらみのマツは松原全体がひれ伏している形に見えます。

三大松原のなかで、虹の松原ほど低く構えて、強い季節風と闘っている松原はありません。まさに日本一です。

(2) もう一つの解釈は、一本一本の木が、特に海岸近くでは風によって陸側に傾いている様子がひれ伏したように見えます。



このような場所ではウオーキングマップにあるように、思わず体が斜めになります。

虹の松原にはクロマツだけでなく、山地に多いアカマツも見られます。クロマツは男松と言われるように葉が刺さるほどに固いのですが、アカマツは女松と言われるように柔らかいです。クロマツ林には松露がよく立ちますが、アカマツ林にはマツタケが立ちます。そのために虹の松原にもマツタケがあるそうです。

海岸にマツの林を作った理由としては、一つはマツが塩分に強いというだけでなく、落ち葉を燃料や堆肥として利用できること、また土木的な工事より、経費が少なくて良いという理由もあったでしょう。

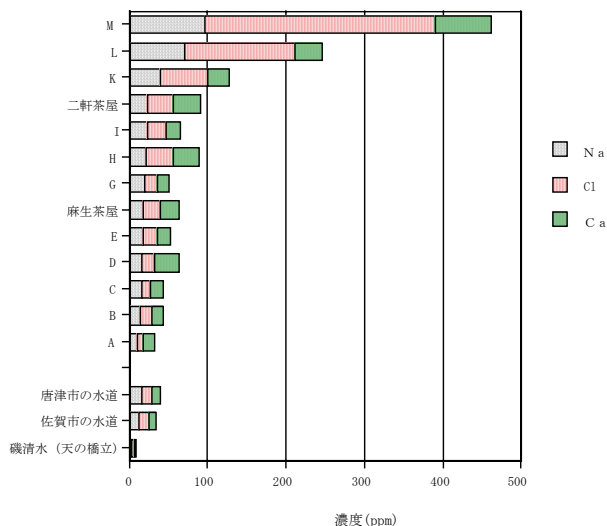
虹の松原には、飛砂防止、防風効果、防潮効果、防錆効果、津波軽減効果、防霧効果などの防災効果があり、防風兼潮害防備保安林として指定されています。

松原の真中に真水

虹の松原にある井戸水の水質を調べたところ、松原の中央付近では、井戸水に含まれる物質の量は最低となっていました。この地点付近では住宅はまばらであり、人的な影響も少ないためです。

天の橋立の「磯清水」も真水で、古来不思議な水として知られています。

昔の人はマツの木が水を清めて真水にすると信じていました。

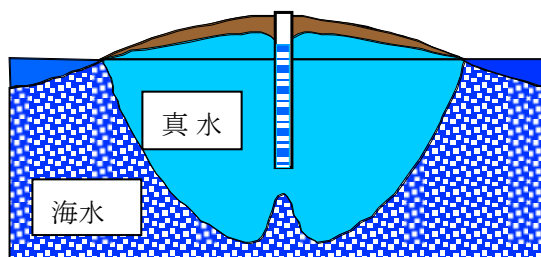


虹の松原の井戸水の水質



天の橋立 磯清水

海岸や島の地下水が真水となる理由は、真水が海水よりわずかに軽いために、右の図のように真水が海水の上に浮かんでいるからです。この水を井戸でくみ上げれば、真水が得られることとなります。



ガイベンヘルツベルグの法則

しかし汲み上げすぎると「ガイベンヘルツベルグの法則」によって海水が上昇してきて井戸水に海水が混入するようになります。住宅が密集している地域では揚水量も多く地下水面は低下し、塩分濃度が高くなります。このために住宅が多い浜崎に近い井戸ほど塩分濃度は高くなっています。

一方、松原の中央付近では、井戸も少ないために、海水も上昇せずに井戸水は真水となっています。

ところで、海岸地下水に関する前述の法則は1900年ごろに発表されたものであり、それまでは不思議な現象であったでしょう。

根上り松

JR東唐津駅の近くに切株だけが残っています。付近の人に聞くと このマツは目立つくらい大きなマツだったそうです。今は切株の上に若マツが育っています。

昔の写真によると、根上り松があった場所は、松浦川がちょうどぶつかる場所ですから、川の氾濫で砂が洗われ根がむき出しになったのでしょう。このようなマツは他にも、香川県「琴弾公園」、福井県「美浜」、静岡県相良町などにもあるそうです。



連理の松

天にありては 願わくば
比翼の鳥と作たらむ
地にありて 願はくば
連理の枝為たらん

玄宗皇帝が楊貴妃と七夕の夜に永遠の愛を誓い合った言葉です。連理の枝とは2本の木の枝と枝が連なって1本の枝の様に結びついて木理が通じていること男女、夫婦の永遠に睦まじく変わらない深い愛の契りのたとえです

強い北風が吹く虹の松原で、連理の松がみられるのは本当に不思議です。それほどに強い絆で結ばれているのでしょうか。現在4、5本見つかっています。他にも見つけた方は是非お知らせください。富岡行昌氏によると、かつて根株は二つで幹の中ほどで二つの松が結合している「連理の松」があったらしいのですが、昭和34年の大雪で倒れたそうです。

松原の縁起の良い場所（藩境は松原の中心地）

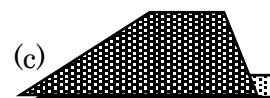
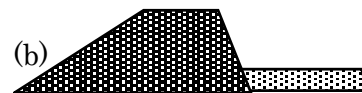
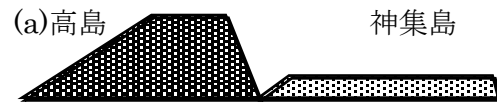
唐津湾に浮かぶ神集島の西端と高島の東端を結んだ延長線上が虹の松原の中心といわれています。今は浜玉町の松原がなくなっていますから、中心とは異なっています。

ところで高島と神集島の位置関係ですが、

(a)は高島と神集島がちょうどくっついて見える場所、

(b)のように神集島が半分ほど見える場所、

(c)のように神集島が少し見える場所があります。



この(b)と(c)との間の松原には体が斜めになる小道があります。

(b)のところを松原の中に入っていくと麻生本家があり、

(c)のところに入っていくと二軒茶屋があります。

「神集島（かしわじま）」と呼ばれる島は、神宮皇后が朝鮮に出兵した折りに神々を集めて海上の安全を祈ったことに由来するとともに、「柏」の木に由来するとも言われています。

お参りすると宝くじが当たるといわれている{高島}と、神様が集まる島の「神集島」が接するよう見える場所は、まさに縁起が良い場所です。

松の樹齢について

比較的若い松の場合は、横に伸びた枝の段数を下から数えると樹齢が得られます。

製材所の方の話によると、およそ直径10cmのものは樹齢50年、直径40cmで100～200年、直径90cmで300～400年のようです。切り株をみていると、直径が小さくても樹齢が大きなものがありますから、あくまでおよその目安です。

樹齢が300年以上と思われる長寿の松も見られます。